

東海道五十三次の内

関宿～坂下宿まで歩く

関宿に入る。今日の午後も快晴で暑い。

2018年7月21日(出)「関宿」は祭礼の様で、各家の軒下にはお祭りの「提灯」が下がっている。

ウォークリーダー（随行案内者）の話に関宿の「東追分」で聞く。

『関宿は江戸から数えて47番目の宿場町で、江戸時代、明治時代に建てられた古い町並みが今でも残っている所で、1984年（昭和59年）に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されています。

関宿は町並み東西15町13間、家数632軒（内 本陣2軒、脇本陣2軒、旅籠42軒）で、人口は女性934人、男性1,008人、合計1,942人です。この街はもともと戦国時代末期に宿駅の設置があり、「関の地蔵」と呼ばれていました。この宿場は江戸方より、木崎、中、新所の3箇所から構成され、「関三町」と呼ばれ、中町が「伝馬役」、木崎と新所が「人足役」を受け持っていた様です。

三重県指定史跡の「東追分」は東海道と伊勢別街道の分岐点で、大鳥居は伊勢神宮を遥拝する為のもので、20年に1度の伊勢神宮式年遷宮の際に鳥居が新しくなります。

御馳走場という所がありますが、ここは関宿に出入りする大名行列の一行を宿役人が出迎え、見送りした所で、関宿には4箇所あって、大名行列が来ると各町では大変な様子が古文書に残っています。

宿場があればお酒を飲む所があり、芸妓の置き場があるので、関宿では芸妓置き場が2軒あったという事です。

関地域周辺を治めていた関氏ゆかりの「端光寺」があります。市指定史跡に指定されていて、境内にある権現柿は、徳川家康が関宿に立ち寄った際に賞味したと伝えられている柿の木です。

西へ行きますと「百五銀行」、その西に「山車蔵」があります。旧川北本陣の門が残っている所を通り、高札場跡から西へ行きますと「国指定重要文化財（建造物）」の「地蔵院」があり、東海道を旅する人々の信仰を集め、現代でも多くの参拝者で賑わっています。

この周辺の街並みは、整備されていて綺麗ですので皆様良く見て頂き、次の地蔵院で詳しく説明いたします」



YUME 追い人

街中を西（京都）に向かって歩く。「百五銀行」が見えて来た。街並みに配慮した意匠の銀行で、平成九年度（1997年）三重県景観造り部門「さわやかまち造り賞」を受賞しているという。平屋ではあるが屋根、外壁、看板等宿場町にピッタリの見栄えのする外観で、この古い町並みに合った造りになっている。

街道に沿って家並みが綺麗に並んでいる。その家の軒先に「提灯」が吊るしてあり、この街道のお祭りを盛り上げている。各家の提灯が吊り下げてある所の細工が良くできている。屋根の持ち送り下に綺麗に作ってあり感心する。



持ち送りの所を工夫して「提灯」を下げてある

「山車蔵」に来る。綺麗な山車でその周りにはこれまた提灯がたくさん吊り下げてある、やわらかい感じの「山車」だ。壇箱の彫刻は龍の彫物が彫ってある。

川北本陣跡の石碑を見て、街道を西へ進む。

商家の2階窓が「虫籠窓」と言う町屋の正面2階にある漆喰で塗りこめた縦格子窓で、関宿では色々な形の虫籠窓がある。関宿の町屋には庇下の幕板、軒の持ち送りの繰り方、2階の漆喰細工やむくり屋根、格子、建具など細部の意匠に工夫されたものが多くある。（ウォークリーダーから聞いたことを頭に入れて商家の2階を主に見て街道を歩く）

関宿を歩いて行くと、「虫籠窓」があったあった。又



関宿「山車蔵」



街並みに配慮した意匠の銀行



川北本陣跡



商家の「虫籠窓」と「鍍絵」



漆喰彫刻の「鶴」



漆喰彫刻の「亀」

漆喰彫刻の「鶴」と「亀」も見る事ができた。これが漆喰できていたとは。左官の技を表したものでこれまた感心する。

玉屋は「関で泊まるなら鶴屋か玉屋」と言われており、玉屋は現在「歴史資料館」になっている。関宿は感心させられる事が見られて驚きである。

「バツリ」と言い、店の前に取り付けられた、普段は上げてあるが商品を並べる時は倒すと棚になり、人が座ったりできるもので、なるほどと思う。

高札場へ来る。この宿場が大きい性もあるが高札場の建物も敷地も大きい。

明治時代になってから作られたと想像するが、洋式の店舗もある所を通り、「地蔵院」に着く。この地蔵院、「関の地蔵に振袖着せて、奈良の大仏婿に取る」の俗謡で名高い「関地蔵院」。ウォークリーダーの話では741年（天平13年）行基の開創と言われている。境内の本堂、鐘楼、愛染堂の三棟が国の重要文化財（建造物）に指定されているという。

町並みを西へ進むと、2階屋根の所に瓦葺きの看板がある所に来る。良く見ると京都から来た旅人が見ると「漢字」で書いてあり、江戸から来る人が見ると「ひらがな」で書いてあるのが見える。ウォークリーダーの話では、旅人が向かう方向が分かる様に、京都側には漢字で、江戸側にはひらがなで書いてあるという。同じ看板でも字が違ふとは。珍しい看板だが字が崩してあるので読むに大変。「関の戸」と書いてあるのだろうか。金色の色が光り、墨が邪魔して良く読めない。

関宿近くの駐車場で整理運動をしてバスに乗り、ホテルルートイン亀山インターに戻る。

今日も1日、暑い中良く歩いた。夕食は「亀山宿あんぜん文化村レストラン ミエ、サンプラザ」でいただく。今回の「旅人企画」が計画した食事は皆美味しく、ゆったり食べられた。ホテルでシャワーを浴び、明日長野に



関宿旅籠玉屋「歴史資料館」の看板



関宿「高札場」



関の「地蔵院」本堂



京都側から見た漢字の看板

帰るので荷物を整える。

7月22日(日)ホテルルートイン亀山インターから昨日と同じ関宿近くの駐車場に到着、準備運動をしてから、関宿地蔵院に向かって歩く。地蔵院から西は「新所」の街並みで「聖正寺」、「長徳寺」、「観音院」などを経て、西追分に向かう。

町並みが綺麗な、匠が腕を振る細工がたくさんあり見る所が多い「関宿」に別れを告げ、西の出入り口に来る。「西追分」に祭りの時のみ建てる仮の門に「長い提灯」が幾つか飾られているのを見る。

京都に向かって歩くと山道になり、かなりきつい坂道に登ると「鈴鹿馬子唄会館」に着く。

体育館の様な大きな建物の中に入り、ここで馬子唄を聞く。12名の会員の方に交代で「鈴鹿馬子唄」を聞かせていただき、最後は記念写真まで撮らせて戴く。

鈴鹿峠を越える馬子達が歌った「夜曳唄」で、東海道を往来する「駄賃付けの馬子」が歌ったものと思われ、日本の馬子歌として南限と言われている。

ここより坂下宿に向かって山中を歩く。

ウォークリーダーの話によると、もっと山の中にあつた宿場が慶安3年（1650年）山水で壊滅的な被害を受け、現在地に翌年移転したという。現在では松屋本陣、大竹屋本陣、梅屋本陣などの標柱や石碑が立っているだけで建物は無い。鈴鹿峠に至る山が連なっている。この先の法安寺や片山神社がある。この片山神社が鈴鹿大明神と呼ばれていた。今では20軒ほどの住宅があるのみで、江戸時代の華やかな坂下宿の面影はないという。

午前中歩いてからバスに乗る前に整理運動をし、昼食はバスの中でいただき、東名高速道経由で長野へ、長野ICに着いたのが9時過ぎ、無事家に帰る。

次回（坂下宿～土山宿）に続く



関宿の街並み



「西追分」の仮の門に飾られた「長い提灯」



「鈴鹿馬子唄」を聞く

訂正 前回第38回の最後の写真と最後から2番目の写真の順序が間違っておりました。コメントはそのままです。訂正してお詫び申し上げます。